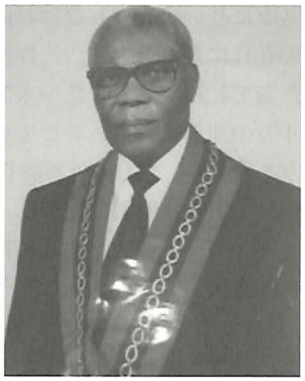
コンゴ社会から見るアフリカ・ヨーロッパ関係試論（40）

パスカル・リスバ①

国際学部教授
おやさと研究所兼任研究員
森　洋明　*Yomei Mori*

「infatigable」という表現は、アフリカの歴史を見ていると、またコンゴで日常に暮らす人たちの姿を見ていると、よく脳裏に浮かぶ言葉である。「疲れを知らない」というフランス語だが、今回取り上げるパスカル・リスバ（Pascal Lissouba）の生き様を見たときにも感じた言葉である。

コンゴは1991年の新たな憲法に対する国民投票で、90％以上の賛成を得て、民主化への移行を決定した。同時に、それまでの「コンゴ人民共和国」から「コンゴ共和国」へと変更し、国旗も現在の三色旗となり、国歌も変更された。政治体制としては、フランスの憲法に倣い、議院内閣制の枠組みを採りながら、国家元首には大統領を有する形を取ることになった。1992年5月、大統領選挙が実施されることになった。選挙には主に4人の有力候補がいた。前大統領のサス＝ンゲソ、民主化への移行期間の暫定的な首相になっていたアンドレ・ミロンゴ、首都のプール県で絶大な支持を得たベルナール・コレラ、そして今回取り上げるリスバである。



パスカル・リスバは、1931年11月15日、コンゴの南部にあるニアリ県に生まれた。当時はフランスの植民地下であり、彼の祖父は植民地の統治に反対する活動家であったようだ。小学生時代は地元とブラザヴィル近郊のボコで過ごし、中学になって首都に出てきた。学業優秀であった彼は、植民地政府からの選出でフランスに行き、南仏のニースで高校生活を送っている。1952年に大学入学資格であるバカロレアを取得した後、同じくフランスの植民地下にあったチュニス（チュニジア）で農業の勉学に励む。フランスに戻った彼は自然科学の学士を取得し、その後も高等教育機関で研究を続け、1961年に博士号を取得、大学での講師に就任した。ここまでの彼のキャリアは学術一本であった。

1962年8月、彼は自身が学んだことを独立して間もない国で活かすべくコンゴへ戻った。そして、国の農業を推進させる機関の責任者となり、さらなる研究を続けると同時に高等教育機関で教鞭をとることになった。彼に人生最初の転機が訪れるのはその1年後の1963年のことである。

1963年8月、「栄光の3日間」（les Trois glorieuses）でユールー初代大統領が失脚し、マサンバ・デバが暫定政権を担ったが、そのときにリスバが農林水産大臣に任命されたのである。農業の発展に加え、水や森林資源の開発を担当するこのポストは、彼のキャリアからすれば最適だっただろう。同じ年の暮れ、デバ氏が大統領に就任すると彼は首相に任命される。当時彼は32歳。コンゴの歴史のなかで最も若い首相となった。首相になっても彼は農林水産大臣を兼任していた。しかししばらくすると、急速に企業の国営化を進めるリスバ首相とそれを懸念するデバ大統領との間に確執が生じ、1966年4月には首相を辞任することになる。

その後しばらくはブラザヴィルの高等教育機関で遺伝子学を教え、またサンガ地方のカカオの生産にも関わっていたようだ。その一方で、政治のあり方については常に関心を持っていて、部族主義にならないようにという嘆願書などを大統領に提出している。デバ大統領が失脚してングアビ大統領に代わると、彼の下で1968年12月から翌年の7月まで、以前と同じポストの農林水産大臣を務めた。

彼が最初に逮捕されたのは、1969年10月のことである。反対勢力の政治家の暗殺容疑だったが、11月には釈放された。ただ、政治活動が2年間禁止されることになり、彼は高等科学学校（後のマリアングアビ大学理学部）の校長に就任し、教育活動に専心する。その2年後の1972年にもクーデター未遂事件の容疑者として再び逮捕され、懲役刑が科せられるが、ここでもすぐに釈放される。同年12月末に開催されたコンゴ労働党の党大会で中央執行部のメンバーとなるものの、政治犯の扱いを巡って党内で反対勢力となった。そのことが影響してか、翌年2月に政権交代を企んだとして逮捕されるものの、4月には自由の身となった。

さらに1976年3月には、ングアビ大統領の政策による犠牲者を擁護する側に立ったことによって逮捕され数週間拘束された。最も大きな出来事は、1977年3月、ングアビ大統領暗殺の数時間後に逮捕されたことだ。当時のンゲソ国防大臣の命令でデバ元大統領とともに逮捕され、1週間後には軍事裁判で死刑判決が下された。このときは隣国でリスバと関係の深いボンゴ大統領の介入と、フランスやアフリカ諸国の科学者からの動きもあり、死刑ではなく終身刑に減刑された。ブラザヴィルから数百キロ離れたリクアラ県にあるエペナという町に移送され、さらにウエッソに移動。1979年3月には釈放されることになるが、2年間の拘留生活はかなり過酷なものだったらしく、釈放後は治療のためにパリに行った。

さすがに「infatigable」な彼も、その後しばらくはコンゴの政治から遠ざかることになる。パリ近郊の大学で遺伝子学を教えるなどしていたが、1985年にユネスコに入って、自然科学部門のアフリカ地区の責任者としてナイロビに赴任し、約5年間を過ごす。

政治のあり方を巡って何度も逮捕され、監獄生活まで経験した彼が、また政治の世界に戻る転機が訪れた。それが1990年、ラ・ボールのフランス大統領による民主化への「圧力」に、一党独裁のコンゴが呼応したときである。リスバはこの機会を見逃さなかった。やはり「infatigable」である。1991年2月から約4カ月間にわたって開催された「最高国民会議」に参加した。また、政権交代期の暫定政権を担う首相に立候補するものの、ミロンゴとの最終決戦では僅差で破れてしまう。

翌年に開催される大統領選挙を前に、1991年7月「社会民主主義パン・アフリカ連合」（l'Union panafricaine pour la démocratie sociale）を立ち上げ、ユネスコの職を辞し、選挙に備えた。1992年2月、彼がブラザヴィルに戻ってくるのを空港で待ち構えていた熱狂的な支持者を前に、彼は「私は自分自身ではなく、皆さんのためにやってきた」と宣言した。

幾度も逮捕・拘留という苦難の道を経て、いよいよ彼が国のトップの座に就くときが近づいてきた。しかしそれがまたさらなる苦難の道となることを、この時点では彼は予想だにしていなかったに違いない。